

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Sergei Bulgakov's philosophy of language and his criticism of Kant's epistemology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北見, 諭 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/756

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ブルガーコフの言語哲学における カント批判のモチーフについて

北 見 諭

1

本論は、20世紀初頭のいわゆる「ロシア・ルネサンス」期の代表的な思想家の一人であるセルゲイ・ブルガーコフの言語哲学を取り上げ、それを当時のロシアの思想的文脈と関連付けながら論じようとするものである。ブルガーコフが『名の哲学』という著作で描き出している言語あるいは言葉に関する思想は、そもそも「讚名派論争」と呼ばれるある神学論争との関わりの中で生じたものであった¹。まずはその神学論争を簡単に振り返ることで、ブルガーコフの言語観の概略を予備的に描き出しておくことにしよう。

その神学論争というのは、信仰者が祈りの中で唱える「神の名」をめぐる行われた論争であった。ある修道士たちが祈りの中で唱えられる神の名には神自身が宿っていると主張し、神の名を信仰の対象にしようとしたのに対して、別の修道士たちがそれを異端と見なし、名は単なる名でしかないと主張したのである。一部の修道士の対立から始まったこの論争は、次第にロシア正教会の広い範囲に広まり、さらには世俗の思想家たちをも巻き込んでいくことになる。ブルガーコフもそのようにしてこの論争に参加した思想家の一人であり、²「神の名には神自身が宿っている」という讚名派の神秘的な主

1 この論争については以下の文献を参照。渡辺圭「20世紀初頭ロシア正教会における異端的活動「讚名派」論争：その概観と問題提起」『ロシア思想史研究』第1号、2004年、175-193ページ。

2 この論争に関わり、讚名派を擁護した思想家としてよく名前を上げられるのは、フローレンスキー、ブルガーコフ、ローセフの三人だが、この三者は一つの学派のように見なされることがある。ボネツカヤなどは、ブルガーコフとローセフの言語哲学は、フローレンスキーの直観

張を擁護し、それに哲学的な基礎を与えようとしたのであった。その結果として生まれたのが、他でもない、われわれが問題にしようとしている彼の言語哲学なのである。

ブルガーコフが行おうとしたのは、讚名派が「神の名」に関して主張していることを言葉一般の問題へと拡張し、神の名だけではなく、あらゆる言葉が指示対象との間に存在論的な結びつきを有すると主張することであった。ブルガーコフの考えでは、言葉は一般に考えられているように指示対象を代理表象する単なる記号なのではなく、指示対象の本質が流出することによって成立するある神秘的な存在なのであり、突き詰めれば、それは指示対象そのものなのである。したがって、神の名もやはり神自身の本質が流出したものであり、それは突き詰めれば神自身だということになる。ブルガーコフはそのようなやり方で讚名派の主張を擁護するとともに、言葉を指示対象の本質が流出したものと見なすような、神秘的とも魔術的とも言える言語理解に基づいて³、自らの言語哲学を構築することになるのである。

ブルガーコフの言語哲学はこのような出自を持ち、そこから帰結する上述のような言語理解を持っている。そのことを考慮すると、彼の言語哲学は20世紀の言語論でありながら⁴、それと同時代の、いわゆる「言語論的転回」以降の言語論とはまったく異質であり、反時代的ともいえるほどに素朴な、あるいは素朴さを乗り越して奇妙と言った方がいいような言語論に思えるだろう。それはたしかにその通りである。ブルガーコフは言葉と指示対象の間

的な着想を論理的、体系的に展開したもので、内容的にはフロレンスキーの思想の範囲を出るものではないとさえ述べている。См. *Бонецкая Н.К.* О филологической школе П.А. Флоренского: «философия имени» А.Ф.Лосева и «Философия имени» С.Н.Булгакова // *Studia Slavica Academiae Scientiarum Hungaricae*. No.37. 1991-1992. С.113-189.

3 ちなみにブルガーコフの同時代の思想家であるフロレンスキーは「言葉の魔術性」という題名の論文を、同時代の詩人であるペールイは「言葉の魔術」という題名の論文を書いている。ブルガーコフも当然こうした文脈の中で言葉の問題を考えているわけである。

4 ちなみに、ブルガーコフの『名哲学』は著者の生前には出版されなかったが、主要部分は1920年前後に書かれたと見なされている。См. *Бонецкая С.Н.* Комментарии к «Философии имени» // *Булгаков С.Н.* Первообраз и образ: сочинения в 2 т. Т.2. философия имени. Икона и иконопочитание. Приложения. М., СПб., 1999. С.387.

に恣意的ではない、本質的な関係を想定しているし、ある存在者の本質が流出することでその存在者の名前が生まれるというような異様な考えを示している。しかし、彼の言語哲学のそうした時代錯誤的な性格を認めたくえて、さらにわれわれが見ておかなければならないのは、それにもかかわらず、彼の言語哲学がなぜか同時代の言語論とどこかでつながっているようにも見えるということである。例えば、ブルガーコフは『名の哲学』の中で、「言葉を語るのはわれわれではない、言葉がわれわれの内で音を響かせながら、言葉自身が自らを語るのである」と述べているが⁵、ブルガーコフの研究者であるロドニャンスカヤはこの部分を引用しつつ、こうした主張が、言葉を「存在の家」と見なしているハイデガーの言語哲学と「ほとんど逐語的に一致する」と述べている⁶。そして実際、言語に関わる後期ハイデガーの著作を見ると、そこにはたしかにこれに類した主張が散見されるのである⁷。また、アメリカの研究者セイフリドも、ハイデガーの言語哲学との類似性に言及するとともに⁸、さらにブルガーコフの言語論が『論理哲学論考』の時期のウイトゲンシュタインの言語哲学とも類似していると指摘している⁹。

そしてさらに、ここにわれわれの見解を付け加えるなら、ブルガーコフの言語哲学はソシュールの言語学とも類似したところがある。たとえば、ブルガーコフは『名の哲学』の冒頭で、「人間の認識は言葉の中で、言葉を媒

5 *Булгаков. Первообраз и образ. С.25.*

6 *Роднянская И.Б. Схватка С.Н. Булгакова с Иммануилом Кантом на страницах «Философии имени» // Богослов, философ, мыслитель : Юбилейные чтения, посвященные 125-летию со дня рождения о. Булгакова (сентябрь 1996 г., Москва). М., 1999. С.61.*

7 ハイデガーの後期の言語哲学については、ハイデッガー『ハイデッガー全集 第12巻 言葉への途上』創文社、1996年、を参照。

8 セイフリドは『存在と時間』など、ハイデガーの初期の思想を参照しつつ、それとブルガーコフの言語哲学の近さを指摘しているが、本論の著者が見る限り、ブルガーコフの言語哲学はハイデガーの初期ではなく後期の思想と類似しているように思える。

9 Thomas Seifrid, *The word made self: Russian Writings on Language. 1860-1930* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2005), pp. 122-125.

10 セイフリドもソシュールとの類似性を指摘しているが、ブルガーコフの *речь* と *слово* がソシュールの *ラング* と *パロール* の対に類似しているというその指摘は、まったく的を外しているといわざるをえない。Seifrid, *The word made self*, p. 121.

介にして行われる¹¹』と述べているが、このような見解はソシュールの言語観とそのまま重なり合うものである¹²。ソシュールもまた、言語を人間の認識に関わるもの、人間と世界の間であって両者を媒介するものと捉えており、他にもないここから、言語を世界構造との関わりで捉える彼の現代的な言語理解も生まれるのである。人間が言語を介して世界を認識するがゆえに、本来は未分化で無定形なものでしかない世界が、人間の意識には言語の差異の網の目を通じた形で、つまり言語構造を投影された形で映し出されるのである。そして、やはり言語を人間の認識に関わるものと見ているブルガーコフもまた、後に見るように、その考えに基づいて言語を世界構造との関わりで捉えようとするのである。こうした点で、ブルガーコフの言語哲学はソシュールの言語学と、さらには、ソシュールの流れを汲んで、同じように言語を世界構造との関わりで捉える構造主義や記号論、さらにはポスト構造主義といった、いわゆる「実体論から関係論へ」の転回を経ることで現れた現代的な理論とも、どこかでつながっているように思えるのである。

このように、修道士の神秘的な言語理解に基づいて構築されたブルガーコフの言語論は、一方では言葉とその指示対象の間に直接的な関係を想定するきわめて素朴な言語論でありながら、他方では、言語を世界構造との関係で捉えるような、きわめて現代的な言語思想とどこか類似したところを持ってもいる。しかし、ロシアのローカルな神学論争から出発するブルガーコフの言語哲学に、なぜそのような現代的な理論との類似性が見られるのか。ブルガーコフは合法マルクス主義から出発して観念論へ転向し、最終的には宗教思想に辿りついた思想家であるが、その経歴からもわかるように、彼は「実体論から関係論へ」という現代的な思想の流れとはまったく無縁なところで

11 *Булгаков. Первообраз и образ. С.13.*

12 実際にはブルガーコフの言語理解とソシュールの言語理解には決定的な差異があるが、それについては後に（第四節）述べる。

13 ここでは丸山圭三郎によって読み直されたソシュールを参照している。丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年。

思考していた思想家であるし、¹⁴彼の言語哲学の出発点となった「神の名には神自身が宿っている」という修道士の神秘的な考えも、関係論的な思考とはまったく無縁であるばかりか、むしろはっきりとそれに逆行するものである。

それではなぜ、言語を世界構造との関わりで見るとような現代的な視点がブルガーコフの言語哲学に備わっているのか。言葉とその指示対象に本質的な結びつきを見るような素朴な言語理解と、言語を世界の構造化の原理と見るような現代的な言語理解は、彼の思想の中でどのようにして一つに結びついているのか。われわれは、そうした問題を考えながら、ブルガーコフの言語哲学にまつわる諸問題を検討していくことにしたい。そして最終的には、本論で明らかにしたブルガーコフの言語哲学の諸問題を、同時代のロシアの思想的文脈に関連付け、より広い視野からその意味を考えてみることにしたい。

2

ブルガーコフの言語哲学が讃名派論争と呼ばれる神学論争との関わりから生まれた言語論であり、言葉とその指示対象に存在論的な関係を見るような素朴な言語論であること、しかしその一方で、それが構造主義や記号論のような理論を生み出した現代的な思想とどこかでつながっているようにも見えることを指摘した。しかし、後者の現代的な思想に関してより正確に言えば、ブルガーコフの思想が類似しているのは、構造主義や記号論のような理論ではなく、むしろそれらの限界を超えようとする、それよりもさらに現代的な理論である。

構造主義や記号論は、人間の経験的な世界が言語のような構造を持つことを明らかにするとともに、その構造化された世界の諸要素を関係論的な観点

14 ブルガーコフの生涯と思想を扱った著作としては以下のものがある。Catherine Evtuhov, *The Cross and the Sickle: Sergei Bulgakov and the Fate of Russian Religious Philosophy, 1890-1920* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1997).

から明らかにしようとするものであった。一方その限界を越えようとする理論は、そうした関係論的思考の成果を評価しつつも、そうした理論が共時的な平面に視野を限定し、そこには回収されない構造の外部に目を向けていないことを批判し、構造や記号体系にとって異質なそうした外部が現れる場面、つまり構造の生成や解体、さらには再構造化といった場면을問題化しようとする。構造主義や記号論は理論的に仮構された共時的な平面を問題にし、そこに見出される完結した構造や記号体系を、とりわけその内側から、つまり構成諸要素間の関係という観点から解明しようとする。それに対してその理論的限界を越えようとする理論は、構造や記号体系が異質な外部と関わる場면을問題化しようとするのである。

言語論的転回以降の思想の流れをこのように整理すると、ブルガーコフの言語哲学が類似しているのが、構造主義や記号論ではなく、その理論的限界を指摘しつつ現れたそれ以降の理論であることが分かる。ブルガーコフの理論は、共時的な平面に現れる構造や記号体系を内側から関係論的、機能的に分析するような洗練された理論とはまったく無縁である。だから、ブルガーコフの言語哲学は、同時代のロシアですでに関係論的な文化理論を構築しようとしていたフォルマリズムのような洗練された理論と比べると、きわめて素朴で前時代的な言語論に見えるわけである。しかし、そうでありながら、そうした彼の言語哲学が、なぜかフォルマリズムはもちろん、後の構造主義や記号論のような理論の視野からも抜け落ちてしまうような問題、つまり構造や記号体系の生成という問題、構造とその外部が関わり合うような場면을捉えようとする問題意識を持っているのである。

しかし、現代的な思想の流れとは無縁のところでは思考していたブルガーコフの言語哲学に、なぜそうした問題関心が現れたのか。構造の外部を問題化するような理論は、構造の内部を関係論的に解明する理論が高度に発展を遂げた後、その理論的限界を究明するような形で現れたものである。そうだとすれば、関係論的思考の洗礼を受けず、それとはまったく無縁のところでは

思考していたブルガーコフの言語哲学に、なぜ構造主義や記号論の限界を越えようとする理論と同じような問題関心が現れるのか。どのようなルートを通してそうした視点がブルガーコフの思想の枠組に入り込んだのか。

それを明らかにするには、ブルガーコフがどのような思想的背景の中で言語を思考していたのかという問題に目を向ける必要がある。ブルガーコフはもともと言語の専門家ではない。そうした思想家として、彼は言語をそれとは異質な問題と結び付けて思考することになるわけだが、そうした異種交配の結果として、言語による世界の構造化という現代的な問題関心が、いわば迂回的なルートを通して彼の思想に入り込んできたと考えられるのである。

ではその思想的な背景というのは具体的には何なのか。端的にいえば、それはカント批判のモチーフ、とりわけカントの不可知論に対する批判のモチーフである。カントの不可知論の問題は、後でも触れるが、当時のロシア思想全体にとってきわめて重要な意味を持つ問題であった。ブルガーコフにおいてもそれは同様である。カントの不可知論に関わる問題は、彼の思想全体の基盤にあって、その思考を意識下で方向付けるような働きをしている。そして、われわれが問題にしようとしている彼の言語哲学もまた、カントの不可知論を克服しようとする潜在的な志向に促されつつ構築されているのである。そしてまさにその結果として、ブルガーコフは言語による世界の構造化という問題を、20世紀の言語思想の展開をはるかに先取りするような形で捉えることになったのである。

しかし、なぜカントの不可知論と言語の問題が重なり合うことで、現代的な言語思想と類似した問題関心が生まれるのか。そのことを明らかにするために、まずはカントの認識論とそこから帰結する不可知論の問題について簡単に振り返っておくことにしよう。

周知のとおり、カントは人間が経験する世界（現象界）と、人間が経験する前のありのままの实在の世界（物自体）を区別した。カントに従えば、人間は人間に固有の認識形式を通してしか世界を認識することができない。だ

から、世界は人間に対して決してありのままの姿で現れることはなく、必ず人間の認識形式を通して、その形式によって構成された姿で現れることになる。この人間に対して現れる世界、人間の認識形式によって人間的に作り変えられた世界が現象界である。それに対して、人間が認識する前の世界、人間的な形式化を受ける前のありのままの存在の世界が物自体としての世界である。カントに従えば、後者の物自体としての世界は、人間には認識することも経験することもできない不可知の世界である。人間が自らの認識形式を媒介にしなければ世界を経験できない以上、世界は人間に対しては常に、人間の認識形式によって構成された姿で現れることになり、人間化される前の世界、ありのままの存在の世界は、原理上けっして人間の経験には現れることがないからである。

これがカントの不可知論である。人間は世界を認識しようとするとき、不可避的に自らの認識形式によって世界を構成してしまい、その構成された世界を認識する。したがって、人間が認識するのは、常にすでに人間的に構成された世界であり、人間化以前の存在の世界、物自体としての世界は、人間にはどこまで行っても不可知にとどまるのである。

ブルガーコフがカントに対して批判的であるのは、他にもない、この不可知論というカント哲学の帰結が彼にとっては受け入れがたいものだからである。逆に言えば、ブルガーコフは物自体が不可知ではなく、人間化される前の存在が人間にとって認識可能であると見なしているわけである。そして、彼はそのことを論証しようとする意図をもって言語の問題をも思考することになる。そのため、彼は言語の問題を、それとは直接関係のないカントの認識論の独自の問題構成と重ね合わせて思考することになるわけだが、われわれが目すべき点はここにある。このような重ね合わせの結果として、ブルガーコフは言語をカントの言う認識形式のようなものと見なすことになるのである。人間は自らの主観に備わる認識形式によって世界を構成する——カントがそのように考えたのだとすれば、ブルガーコフはそれに対抗するよう

に、人間は主観の形式ではなく、言語の形式によって世界を構成するのだと主張するのである。つまり、人間は主観的に構成された世界ではなく、言語的に構造化された世界を認識するということである。ブルガーコフはカントの認識論の世界構成という考え方と言語を重ね合わせることで、言語を構造化の原理、カント的に言えば超越論的な形式とするような言語理解を成立させることになるのである。

ブルガーコフの言語論が現代的な言語思想、とりわけ構造主義や記号論を超えようとする理論と一定の類似性を持つことになる原因はここにある。構造主義や記号論は、言語による構造化が終わった後の世界、カント的に言えば、超越論的構成が終わった後の世界を問題にし、そうした世界に投影されている言語の形式を関係論的な観点から解明するものであったと言える。しかし、構造化の後の世界を問題化するこうした理論は、それによって深層の構造を明らかにするという成果を上げた反面で、逆に構造化の場面そのもの、カント的に言えば超越論的な構成の場面そのものをその視野から外してしまうことになった。そうした理論の限界を究明するために現れたのが、構造の生成の場面そのものを問題化しようとする理論であった。ブルガーコフはこうした思想の流れを辿ったわけではないが、カントによる世界構成の考え方と言語の問題を重ね合わせることで、彼の言語哲学は、構造主義や記号論を乗り越えようとするはるかに後の現代的な思想と、図らずも一定の類似性を持つことになったのである。

素朴な言語観から出発するブルガーコフの言語哲学が、なぜ現代的な思想と類似した言語理解を示すことになるのかを、われわれはここまで抽象的、図式的なレベルで明らかにしてきたが、次の節では少し論を戻し、ブルガーコフの『名の哲学』の中でカントの問題構成と言語の問題がどのように重ね合わせられているのかを、今度は具体的、実証的に、『名の哲学』からの引用も交えながら概観しておくことにしたい。

3

ブルガーコフは言語哲学を扱った著書『名の哲学』の中で、次のようなことを述べている。「経験的認識の基礎に関するカントの問題（…）は、言語によって解決される¹⁵。『経験的認識の基礎』、つまり経験的世界がいかにして成り立つのかというカントの超越論的な問題は、言語の考察によって解明されるということである。また別の個所では、次のようなことも述べている。「カントの認識論の最大の一面性は、彼が言語の脇を素通りしてしまったこと、文法にまったく注意を払わなかったことにある。（…）カントの批判のナイフは、思惟のもっとも深みにある層、すなわち言語という層には到達することがなかった。そのナイフが切り開いたのは、外面的で表面的な、派生的な層にすぎないのである¹⁶。カントは人間の経験的な世界がいかにして成立するのかという超越論的な問題を、その認識論において究明している。しかし、ブルガーコフに従えば、そこでカントが明らかにしたもの、つまり世界を構成するものとしてカントが見出した主観の形式は、「外面的で表面的な、派生的な層」にすぎないのである。そうした表層の奥には、人間的世界を構成するより根源的な原理がある。そしてそれこそが言語だということである。

周知のとおり、カントは認識を、下級の認識能力である感性と、上級の認識能力である悟性が共同的に働くことで成立するものと考えている。感性が行う直観は、われわれが外界の対象に出会うとき、その対象の多様な印象をわれわれにもたらすとともに、それらの感覚的なデータを直観形式によって秩序化し、認識の対象を構成する。一方悟性が行うのは思惟であり、それは直観の形式によって構成された対象を、悟性概念であるカテゴリーを通して思惟するのであり、その結果として認識が成立するのである。

ブルガーコフはカントが描き出すこのような認識のプロセス、つまり感性

15 *Булгаков. Первообраз и образ. С.99.*

16 *Булгаков. Первообраз и образ. С.76.*

による対象の構成と、悟性によるその対象の思惟というプロセスを下敷きにして自己の理論を構築しているのだが、しかし同時に、彼はそこに決定的な修正を加えてもいる。つまり、ブルガーコフはカントが見出した感性や悟性といった主観の働きに先立って、すでに言語が認識を成立させる条件を整えていると主張しているのである。

たとえば、まずは悟性の方から見ておくと、ブルガーコフはカントのカテゴリー論を批判しつつ、カントが自分の発見と見なしているカテゴリーは、実は言語によってすでに予見されていたか¹⁷、カントの『純粋理性批判』は、文法に対する認識論的なコメントリーにすぎないなどと言っている¹⁸。要するに、カントは人間が主観の形式であるカテゴリーの規則に従って思惟しているかのように言っているが、実はそのカテゴリー自体が言語の中にあらかじめ書き込まれているものであり、したがってより根源的には、人間は主観の形式であるカテゴリーに従ってではなく、言語の規則に従って思考しているということである。ブルガーコフはカントの認識論の構図を利用しつつ、その構図に言語を付加することで、人間の思惟は主観の形式ではなく、実は言語の形式に従っていると主張しているわけである。

しかし、言語と認識との関係ということ言えば、悟性の形式であるカテゴリーよりも、もう一方の感性の形式の方がより重要な問題だと言える。というのは、上にも述べたように、カントにおいては人間が経験する世界はありのままの世界ではなく、人間が自己の認識形式によって独自に構成した世界であったが、そういう人間独自の世界を作り出す上で、最初の、そして決定的な働きをするのが、ほかならぬ感性の形式だからである。

そのプロセスをカントに従って簡単に描いておこう。人間は認識の最初の

17 「カントのカテゴリーのすべてがどれほど言語によって予見されていたか、理性の立法者が（カントのこと——北見）、実際には文法の後を追いかけているにすぎないこと、そのことを確認するのは難しいことではない」。Bулгаков. Первообраз и образ. С.84.

18 「こうしてわれわれは、純粋理性批判が、著者の意志とは別に、そして著者が認めることがないまま、その本質的な内容において、文法に対する認識論的なコメントリーになっていることを確信するのである」。Bулгаков. Первообраз и образ. С.88.

段階で、まず外界の対象から何らかのやり方で「触発」を受ける。そしてこの触発の結果として、われわれの表象能力には感覚が生じるわけだが、この感覚が感性の形式によって秩序付けられることで、対象に対する主観的な表象が生み出される。われわれの内側に生じるこの表象こそが、外界の対象とは異なる人間独自の構成された現実となるのである。こうしたカントの理論に従えば、表象を生み出す直観の働きこそが、人間独自の世界であるその経験的な世界を、一番底のところで規定している要因であるということになる。しかしブルガーコフは、ここでもやはりカントの理論を批判しつつ、感性の形式よりも言語の方がより根源的な原理であると主張するのである。ブルガーコフは次のように述べている。「認識の第一の要素は、表象でもなければ、感覚でもない。(…)カントやカント主義者が対象と名づけるものは、(…)すべてあらかじめ言葉によって実現されているのである¹⁹」。

カントは認識の対象は感性による直観という主観の働きによって構成されると見なしている。しかしブルガーコフは、認識の対象は、したがって人間に固有の経験的な現実とは、主観によって構成されるまでもなく、すでに言葉によって与えられていると考えているわけである。カントの場合には、外界は人間には認識不可能なある不可解なものでしかないから、それはまず感覚という形で人間の主観に取り込まれ、主観による秩序化を経て表象が変わることで、ようやく人間的な認識の対象となるわけである。しかしブルガーコフは、世界は主観によるそのような構成を受ける前に、すでに言語によって構造化されていると考えている。人間主観が世界を構成する必要はない。世界は主観の働きに先立って言語によってすでに形式化され、構造化されているのだから、人間主観が手を加えるまでもなく、世界はすでに人間にとって認識可能な状態になっているのである。

19 *Булгаков. Первообраз и образ. С.102.* 上記の引用の省略個所で、ブルガーコフはプラトンのイデアについても触れている。本論の最後でも触れるように、プラトニズムはブルガーコフの言語哲学を理解する上で重要な意味を持っているが、ここでこの点に踏み込むと中心的な論旨からかなり外れなければならないので、ここでは省略することにした。

人間が経験する世界は、カントが言うように感性という人間主観の働きによって構成されるのではないし、悟性という人間主観の規則に従って思惟されるのでもない。世界は人間主観が働く前に、すでに言語によって構造化されており、そのように言語によって構造化された世界が、カテゴリーという主観の規則ではなく、言語の規則に従って思惟されることで認識が成立するのである。人間が経験する世界は、最初から最後まで、徹頭徹尾言語によって規定されているわけである。カントが言うように、人間は主観の形式を通して世界を経験するのではなく、言語を通して、言語的に構造化された世界を経験するのである。悟性や感性といった主観の形式も実は言語に規定されているのに、カントはそれを見落としていたために、あたかも主観の形式が世界構造を規定しているかのように考えてしまった。しかし主観の形式はあくまでも派生物にすぎず、より根源的なところで主観の形式をも世界構造をも規定しているのは、実は言語なのである。カント批判に立脚するブルガーコフの言語哲学は、そのようなことを主張しようとしているわけである。

4

このように、ブルガーコフはカントの認識論を下敷きにしつつ、カントが見出した人間主観の働きよりもさらに根源的なところに言語の働きを想定することで、言語こそが世界を構成するより根源的な原理であるという考えを主張しようとしている。言語は人間と世界の間にあって、人間の主観の構造と、客観である世界の構造を同じように規定している。だから言語の働きを見逃してしまうと、世界と同じ構造を持つ主観が、あたかも客体である世界を構成しているように見えるが、実際には主観の働きに先立って言語の働きがあり、その言語の働きこそが、主観の構造と世界の構造を同時に決定している、ブルガーコフはそのように考えているわけである。

世界構成という超越論的な場面の中に言語を位置づけるこうしたブルガーコフの言語論は、構造主義や記号論以降の現代的な理論、構造の生成という

やはり超越論的な場面を問題化するような理論と図らずも類似してくることになるわけだが、それについてはすでに触れたので、ここで繰り返すのはやめよう。これから問題にすべきなのは、ブルガーコフの言語哲学が現代的な理論に類似していながらも、しかしそれとは決定的な差異を持っていることである。そのことを明らかにするために、まずはブルガーコフの言語哲学とカントの関係をさらに別の側面から考察しておこう。

われわれは前に、ブルガーコフの言語哲学を潜在的に導いているのはカント批判のモチーフであり、その批判の内実は、カントの不可知論の拒絶にあると言った。カントは、人間は物自体の世界、つまり人間が認識する前のありのままの实在を認識できないと考えていたわけだが、ブルガーコフの思想は常にこうした考えを批判し、实在の認識可能性を論証しようとする方向に導かれているのであった。そしてそれは、言語哲学の場合でも同様である。上に見たように、ブルガーコフの言語論はカントの言う主観の形式を批判し、言語の形式をそれよりもより根源的なものと見なすという形で、カント批判として構築されている。しかし、少し立ち止まって考えればわかるが、こうしたブルガーコフの試みは、カントの認識論を部分的に修正することにはなっても、カントの不可知論を克服することにはならないはずである。世界を構成する原理がカントの言う主観の形式からブルガーコフが考える言語の形式に変わったところで、ありのままの世界（物自体）と、何らかの形式によって構成された人間的な世界（現象界）という対立はそのまま残ってしまうからである。世界を構成する形式が主観の形式から言語に変わったところで、人間が主観化あるいは言語化された世界しか認識できないということ、逆にいえば人間的に構成される前のありのままの世界が人間には不可知にとどまるという構図は、一切変更をこうむることなくそのまま残ってしまうのである。

しかし、実際にはそうではない。上に見たように、ブルガーコフは執拗にカントの認識形式よりも根源的なところに言語の働きを見ようとしていた

が、それはカントの認識論に言語の問題を付加してそれを部分的に修正するためではないのである。そうではなく、彼はそれによってカント的な世界の捉え方そのものを覆そうとしているのである。

問題は、ブルガーコフの言語解釈においては、言語によって構成されるのが、実は人間の経験的な世界ではないということにある。カントやソシュールの場合、主観や言語の形式によって構成あるいは構造化されるのは、人間の経験的な世界、つまり人間主観の内側に映し出される表象の世界であった。人間が主観や言語の形式を通して世界を経験するために、人間の主観に対しては、世界がそれらの形式を伴った形で現れるということである。実在の世界そのものが変容するわけではない。人間に対するその現われが変わるだけである。しかし、ブルガーコフはそのようには考えていない。言語が世界を構造化すると言う時、ブルガーコフは実在の世界そのものが言語的な構造を備えたものに変容すると考えている。言語は人間の主観に現れる表象の世界を構成する原理なのではなく、実在の世界そのものを構造化する原理なのである。ブルガーコフにおける言語は、実はカント的=ソシュールのな超越論的形式ではなく、人間化される前の実在そのものの構成に関わる、いわば超越的な形式なのである。ブルガーコフ自身も次のように述べている。「この問題は、超越論的な分析においてとりわけ明瞭に現れる問題ではあるが、まったく超越論的な問題ではない。それは、存在論的あるいは形而上学的、もしくはカントにとってそう呼ぶのが都合がよいなら、「超越的な」問題ととってもいいものである²⁰」。言語の働きは、人間による経験的な世界の構成という超越論的=カント的な場面を考えることでよく理解できるが、言語そのものは実は超越論的な形式ではなく、人間化される前の実在そのものに関わる超越的な形式であるということだ。

しかし、言語が実在の世界を構造化するというのはどのような事態なのか。言語が実在の世界そのものを変容させるというような事態は、明らかに

20 *Булгаков. Первообраз и образ. С.102.*

われわれ人間の常識の範囲を超えている。ブルガーコフは、そのような神秘的な事態をどのようにして理論化するのか。結論から言えば、ブルガーコフはこのような事態を決して理論化しているわけではない。ブルガーコフはここではっきりと、哲学の次元を離れ、神学の次元に移行してしまうのである。彼は言語が実在の世界を構造化するという神秘的な考えを、哲学的、理論的な言葉で説明するのではなく、聖書の言葉に依拠しつつ、神話的なレベルで語り始めるのである。では、ブルガーコフはこのようなかからさまざまな飛躍を犯すことで、世界と言語の関係をどのように捉えようとしているのか。彼は聖書の言葉を引用しつつ、次のようなことを述べている。

はじめに言葉があった—— *Ev αρχηι ην ο λογος* ——。世界存在の始原、宇宙のアルケーの内には、つまり存在の前存在的な原素材、存在の潜在的な渴望の内には、その渴望を実現する言葉、光をもたらす言葉があったのだ。その言葉の中で、すべてのものは自らの名を受け取り、自らの分離独立性を得る。アペイロンは形を与えられ、すべてのものは言葉 = 思惟となって即かつ対自存在へと呼び起こされるのである。²¹

ブルガーコフは、ヨハネの福音書の「はじめに言葉があった」という記述を、以上のように解釈している。つまり、「世界存在の始原」にはアペイロン（限定されないもの）としての世界、つまり未分化状態にある「前存在的

21 フランスの研究者であるデンは、ブルガーコフが言葉の本質の解明によってではなく、最終的には信仰に訴えることで讀名派を正当化していると述べている。Денн М. Вклад Сергея Булгакова в дело оправдания и исследования имяславия // С.Н.Булгаков: Религиозно-философский путь. Международная научная конференция, посвященная 130-летию со дня рождения, М., 2003. С.203. ロドニャンスカヤも、ブルガーコフにとって「哲学は神学へ向かうための不可欠のトランポリン」でしかないこと、「彼は哲学という道具が不正確さを現わし始めると、すぐに哲学的分析から神学的思弁へと移行してしまう」ことを指摘している。См. *Роднянская*. Схватка С.Н. Булгакова с Иммануилом Кантом. С.61.

22 *Булгаков*. Первообраз и образ. С.103.

な原素材」としての世界があったということである。この未分化状態の世界は、「光をもたらす言葉」＝ロゴスの登場とともに、「潜在的な渴望」の状態を脱して現実化する。つまり、すべてのものが「自らの名を受け取り、自らの分離独立性を得る」わけだが、これを言い換えるなら、言葉の登場とともに、未分化状態の世界が諸部分へと分節され、そうして分節された諸部分が、独立した「即かつ対自存在」として生起するということになる。²³

ついでに言えば、こうしたイメージは再びソーシャルにおける言語と世界の関係と一定の類似性を持っている。すでに触れたように、ソーシャルにおいてもまた、言語化以前の世界は自明な境界によって区切られていない未分化状態の連続体としてある。しかし人間がそうした世界を言語を介して経験するため、人間に対しては、そのような連続的な世界が言語の差異の網の目を通して分節された形で、つまり言語構造を投影された形で現れることになるのである。ソーシャルは言語による世界の構造化を、言語による連続体としての世界の分節化、差異化の働きと見なしているわけである。

それと比較すれば、超越論と超越という決定的なレベルの違いがあるものの、ブルガーコフも世界の構造化をソーシャルとほとんど同じように考えていることが分かるはずである。ブルガーコフにおいても、原初の言葉＝ロゴスは、未分化状態にあるアモルファスな始原の世界に形を与え、自明な差異を持たない連続体を分節化して「分離独立性」を持った個的存在を析出するのである。ブルガーコフが別の個所で用いている言葉で言えば、言語には「世界創造的な差異化の力 *сила миротворческого различения*」が備わっているのである。²⁴

ブルガーコフはさらに、同じ思想は「創世記」にも語られていると言う。そこでは、神の言葉以前には「地は混沌として空虚であり、闇が深淵の面に

23 ボネツカヤも指摘しているように、ブルガーコフの世界創造のイメージは無からの創造ではなく、創造に先立つ原素材を想定するような、グノーシスの性格を持っている。См. *Бонецкая, О филологической школе П.А. Флоренского*. С.167.

24 *Булгаков. Первообраз и образ*. С.103.

あった」とされている。つまり、「すべてが無差異の闇の中にあった」のである。しかしそこに神の言葉が現れることで、世界は光と闇に分節され、そこから未分化の世界の分節化＝差異化が始まり、それが世界創造のプロセスになる。²⁵ここでもまた、未分化状態の世界が言葉によって差異化され、構造化されたコスモスに変容するという思想が語られていることになる。

ブルガーコフは、このように聖書の記述を下敷きにしなが、言語を連続的な世界を分節化する原理、形式を持たないカオスを差異化し、コスモス化する原理として捉えており、この点ではソシュールをはじめとする現代的な思想と驚くほど類似していた言語理解を成立させている。しかし、ここで話を戻せば、われわれが今注目すべきなのは、こうした類似性ではなく、むしろそこに伴っている決定的な差異である。ブルガーコフは言語による世界の構造化という事態に関してソシュールとほとんど同じようなことを言っているが、ソシュールが考えているのはあくまでも人間の主観に映し出される表象の世界であり、言語は人間の経験的な世界を構成する人間的な原理でしかない。それに対して、ブルガーコフの場合、言語は同じように差異化によって世界を構造化する原理だが、それが構造化するのは実在の世界そのものである。ブルガーコフにおいては、言語は世界創造に関わる超越的＝神的な原理なのである。現代の言語論が超越論的な場面で言語を問題にしようとするのに対して、ブルガーコフはそれと平行してはいるものの、決定的に異なる次元で、つまり超越の次元、あるいは神学的、神話的な次元で言語を意味づけようとしているわけである。

ところで、この節でわれわれが問題にしようとしていたのは、ブルガーコフがカントの認識形式を主観の形式から言語の形式に取り換えただけであれば、彼は結局不可知論の枠組から出ていないことになるということだった。しかし、実際にはそうではないということは、これまで述べてきたところから理解できるはずである。人間的な世界の構成という超越論的な問題を考え

25 *Булгаков. Первообраз и образ. С.103-104.*

ている限り、人間が経験する世界とありのままの实在の世界の間には不可避的にズレが生じ、不可知論が帰結することになる。しかし、言語が構造化するのが实在の世界そのものであり、人間が同じ言語を介して言語化された实在の世界を認識するのだとすれば、人間が認識する世界と实在の世界は一致する。人間は自らの主観の形式を投影して世界を人間化するまでもなく、世界そのものの形式に基づいて、实在の世界をそのままの姿で認識できるわけである。

ブルガーコフはそうしたやり方でカントの不可知論を克服しようとする。しかし言うまでもなく、これによってカントの不可知論が克服されるわけではない。ブルガーコフはただ、哲学から神学へと移行することでカントの問題圏から離れ、カントとは関係のない、世界秩序に関する神話的な物語を語っているにすぎない。ブルガーコフはそのような飛躍によって、实在の世界の認識可能性を自らの願望として主張しているにすぎないのである。しかし、われわれの意図はブルガーコフの言語哲学が犯しているこのような飛躍を批判することにあるのではない。そうではなく、ブルガーコフがこのようなあからさまな飛躍を犯してでもカントの不可知論を否認しようとするとき、そこにどのような意図があるのか、あるいは意識的な意図ではないとすれば、そこにどのような無意識的な志向が働いているのか、そのことを明らかにしたいのである。²⁶すでに述べたように、カント批判のモチーフはブルガーコフのみに見られるものではなく、同時代のロシア思想に広く見出されるものである。ブルガーコフがその言語哲学の中で行う飛躍の背景にある意図や志向を考えることは、20世紀初頭のロシア思想全体をその深層において

26 ブルガーコフはヨハネの福音書を引用した後、つまりまさに哲学から神学に飛躍した後、人間は「この鷲のような飛翔において」はじめて、世界の認識可能性の問題を解決できると述べている。そして、「意味なき世界の支配を前にした無力な懐疑の状態」、つまりカント的な懐疑から逃れるには、「この飛翔へ回帰する」こと、つまり聖書の神話的な言語解釈に回帰するしかないと述べている（*Булгаков. Первообраз и образ. С.102.*）。こうした主張からも分かるように、ブルガーコフによる哲学から神学への飛躍は完全に自覚的である。だから、ブルガーコフが犯した飛躍を批判してもまったく意味はない。問題にすべきは、彼がこうした自覚的な飛躍を行う背後にどのような衝動があるのかということである。

方向付けている根源的な要因を捉える手がかりになるはずである。次節ではこれまでの本論全体をまとめつつ、そうした問題について簡単に触れておくことにしたい。

5

まずはこれまでの経過をまとめておこう。われわれは、ブルガーコフの言語哲学が讃名派論争という神学論争に端を発するものであり、言葉とその指示対象に存在論的な関係を想定するような時代錯誤的な言語論でありながら、同時に言語を世界構造との関係で捉えようとする現代的な観点を有していることを見たとえ、こうした相反する要素がどのようにして彼の言語哲学の中で結び付いているのかを考えるとところから出発したのであった。われわれはそれを明らかにする上でカント哲学との関係を考えた。そこで明らかになったのは、言語の問題がカントの超越論的な問題構成の中で思考されることで、言語がカントの言う世界構成の問題、言い換えれば、世界の構造化との関わりで捉えられる結果となり、そのためにブルガーコフの言語哲学と現代的な言語思想との間に一定の類似性が生まれることになったということ、しかしその一方で、ブルガーコフがカントの不可知論を克服するために、言語を超越論の次元から超越の次元に移して思考するため、ブルガーコフの言語論はほとんど言語と世界に関する神話的な解釈となっており、現代的な理論とは、言語理解に関して平行性を保ちながらも、決定的な差異を持つものになっていたということであった。

われわれは以上のような考察を行ってきたわけだが、ブルガーコフの言語哲学に関しては他にも問題にすべきことは少なくない。たとえば、ロシアの言語思想の研究者であるボネツカヤがブルガーコフの言語哲学を生み出した要因として指摘している三つの事柄²⁷——讃名派論争、ソフィア論²⁸、フロー

27 *Бонецкая. О филологической школе П.А. Флоренского. С.147-166.*

28 ソフィア論についてはここでは触れないが、ロシアの宗教思想を考える上で欠かすことのできない問題である。以下の文献を参照。*Сапронов П.А. Русская софиология и софийность.*

レンスキーの影響——については、ここではほとんど触れていないし、同じくロシアの言語思想の研究者であるホルジーが指摘している、讀名派を介したグレゴリオス・パラマスのウーシアとエネルゲイアに関わる思想の受容、それに伴って生じるロシア思想のプラトニズム段階からネオ・プラトニズム段階への移行というような問題²⁹も、やはりこの論文では扱うことができなかった³⁰。われわれが取り上げたカント批判という観点だけでは、ブルガーコフの言語哲学にまつわるこれらの重要な問題を視野に入れることができないということは認めざるを得ない。

しかしそれを認めたとえで、カント哲学との関係というこれまでほとんど顧みられることのなかった観点を採用したことは³¹、ブルガーコフの言語哲学を考える上で、やはり有効な方法だったと考える。それは、上に述べたように、カント批判のモチーフが20世紀初頭のルネサンス期のロシア思想に頻出するモチーフであり、この問題を軸としてブルガーコフの言語哲学を同時代のロシア思想の文脈に接続できるように思うからである。

われわれは、これまでいくつかの論文でそうした文脈を問題にしてきた。その文脈というのは、ニーチェやベルクソンなど、いわゆる「生の哲学」の受容に関わる場面で特に顕著に現れてくる問題である。ロシアの思想家によ

СПб., 2006. また、日本語で書かれた次のような文献もある。滝澤義雄「セルゲイ・ブルガーコフのソフィア論」『ロシア文化研究』第二号, 1995年, 15-27ページ。

29 См. Хоружий С.С. Имяславие и культура Серебрянного века: Феномен Московской школы христианского неоплатонизма // С.Н.Булгаков: Религиозно-философский путь. М., 2003. С.191-207.

30 エネルゲイアの問題に関しては、日本のブルガーコフ研究者である堀江広行の以下の論考を参照。堀江広行「セルゲイ・ブルガーコフの『名の哲学』とその人格（リーチノスチ）の概念の問題について」『ロシア史研究』第77号, 2005年, 3-19ページ。

31 ブルガーコフの言語哲学をカント哲学という観点から扱ったものとしては、すでに引用したロドニャンスカヤの論文がある。Роднянская. Схватка С.Н. Булгакова с Иммануилом Кантом. しかし、ブルガーコフとカントに関する彼女の論考はわれわれには不十分なものだし、カント哲学に関して不正確な理解も含んでいると言わなければならない。

32 たとえば、拙論「物とイデア——ヴァチエスラフ・イワーノフの美学とプラトン主義」『プラトンとロシア』, 北海道大学スラブ研究センター, 2006年, 53-74ページ, 「持続とイデア——ロースキーの形而上学におけるベルクソンとプラトン」『プラトンとロシアII』北海道大学スラブ研究センター, 2007年, 66-84ページ, などを参照。

る生の哲学の受容には、ある共通した傾向がある。彼らは生の哲学を極めて高く評価し、生の哲学の問題構成を自分の思想の根幹に取り込むほど強くその影響を受けているにもかかわらず、同時に同じ生の哲学に対して徹底して批判的でもあり、自らの思想をそれに対置させようとするのである。われわれはロシアの思想家のこうしたアンビバレントな態度の意味を検討することで、彼らの思想の背後にある潜在的な志向を明らかにしようとしたのだが、そこで問題になっていたのも、実はやはりカントの不可知論に関わる問題だったのである。

ロシアの思想家が生を高く評価するのは、彼らがそこにカントの不可知論を克服する可能性を見出したからである。周知のとおり、生の哲学は意識や理性を中心に思考してきた西欧哲学の伝統を批判し、意識や理性に先立つ根源的な事実としての「生」を問題化しようとするわけだが、ニーチェやベルクソンなどがそれによって捉えようとしていたのは、意識や理性といった人間的なものに先立ってあるはずの根源的な世界、言いかえれば、人間の意識や理性に映し出される前の世界、つまりまさにカント的な物自体の世界なのである。ロシアの思想家は、ニーチェやベルクソンがディオニュソスや持続の概念のもとにそうした世界を問題化しようとすることを高く評価するのである。しかしその一方で、ロシアの思想家は生の哲学に対して徹底して批判的でもある。彼らが何を問題視しているのかと言えば、ニーチェやベルクソンが人間化以前の实在を、カント的＝人間的な秩序を持たない世界として、いかなる形式も構造も持たない盲目的なカオスと見なしていることである。ロシアの思想家の考えでは、人間化以前の实在は、カント的＝主観的な秩序を投影される前に、すでに超越的＝神的な秩序を備えている。ありのままの实在は、人間によって低次の秩序を与えられるまでもなく、より高次の神的な原理によってあらかじめ形式化されているのである。西欧の生の哲学はそうした秩序を見落としたために、本来コスモスとしてあるはずの世界を盲目的なカオスに貶めてしまったというわけである。

生の哲学の受容に見られる以上のような共通の傾向から、われわれは以前の論文で、ロシアの思想家たちを導いていると思われる潜在的な志向を明らかにしたのであった。それを簡潔にまとめれば、その志向というのは、第一には、カントが不可知と見なした人間化以前のありのままの实在を、カント的な主観を通さずに直接的に捉えようとする志向であり（この点で彼らは生の哲学に同調する）、第二には、その人間化以前の实在を、単なるカオスではなく、超越的な秩序を備えたコスミックな世界であると見なそうとする志向である（この点で彼らは生の哲学から離反する）。

そして、生の哲学の受容に関わるロシア思想の特徴をこのようにまとめると、そこに見られる二つの志向が、本論で考察したブルガーコフの言語哲学にもほとんどそのまま見られることが分かるはずである。ブルガーコフもまた、その言語哲学において人間化以前の实在が認識可能であることを論証しようとしていたし、さらには明らかな飛躍を冒してでも、その实在を超越的な秩序を備えたコスモスであると見なそうとしていた。彼が言語を超越論的な問題から超越的な問題へと移行させるのも、言語がもたらす世界構造＝世界秩序を、カント＝ソシュール的な人間的＝恣意的な秩序としてではなく、超越的＝絶対的な秩序として意味づけるためなのである。ブルガーコフの言語哲学は、生の哲学を受容しつつもそれを独自に修正しようとする同時代のロシアの思想家たちの思想と、その深層の志向において明らかに平行性を持っているのである。

そしてこの点でもう一つ付け加えるなら、ロシア思想に固有の傾向は、一方では、われわれが見てきたようにカント批判という形で現れるわけだが、もう一方では、その裏面として、プラトニズムへの回帰という形をとって現れもする³³。ロシアの思想家はカントが象徴する主観的＝人間的な秩序を

33 ガイデンコは、世紀転換期のロシアの宗教思想においては形而上学への転回が特徴的に見られるとした上で、それは新カント派や実証主義の認識論中心の哲学から、ベルクソンやハイデガーなどの存在論中心の哲学へ移行した西欧哲学の動きと平行する現象であると見なしている。Гайденко П.П. Владимир Соловьев и философия Серебряноговека. М., 2001. С.211. ロシ

拒絶する一方で、プラトンが象徴する実在それ自体に備わる超越的な秩序を求めるのである。それゆえに、生の哲学を受容した思想家たちにはカント批判のモチーフとともに、その裏面としてプラトニズムへの回帰のモチーフが現れるわけだが、実はブルガーコフの言語哲学においても、カント批判とともにプラトニズム回帰というモチーフも顕著な形で現れているのである。

ここではもうこの問題に深く立ち入る余裕はないが、プラトニズムはブルガーコフの言語哲学においてもその基盤をなしている。³⁴ブルガーコフは、世界は原初の言葉＝ロゴスによって構造化されると考えていたが、この構造化は、ブルガーコフの言葉で言えば、「宇宙の自己イデア化 (самоидеация)」として生じる。³⁵世界の構造化は、言葉＝ロゴスによってまだ秩序化されていない世界が、人間という神の似姿であるロゴスの存在の名づけ行為を通して、始原の言葉＝イデアを想起し、自己をイデア化していくこと、それによって言葉を持たない世界が言葉化された世界へ、イデア・コスモスへと変容することなのである。³⁶今はブルガーコフの言語哲学のこうした側面を詳しく紹介することはしないが、ブルガーコフの言語哲学が、カントからプラトンへというこの時代のロシア思想に共通して見られるのと同じ軌跡をたどっているのは疑いのないところである。

このように、上述の二つの志向に促されていることとともに、カント批判からプラトニズム回帰という典型的な軌跡を描いている点からも、ブルガー

ア哲学の形而上学への回帰と西欧哲学の存在論への転回が同じものだとは思わないが、ガイデンコが言い当てようとしている事態は、われわれがここで問題にしているのと同じ事態である。

34 プラトニズムについては多くの論者が指摘しているが、一つ例を挙げれば、ベズレブキンが讃名派以降のロシアの言語哲学全般について次のように述べている。「名の哲学においては、世界がキリスト教プラトニズムという水脈の中で再考されることになる」。Bezlepkin N. *Философия языка в России: К истории русской лингвофилософии*. СПб., 2001. С.330.

35 Булгаков. *Первообраз и образ*. С.25.

36 ボネツカヤは、言語の発生に関わるブルガーコフの主張を、「言葉を語る生きたコスモスについての神話」として性格づけている。Бонецкая. *О филологической школе П.А. Флоренского*. С.168. ブルガーコフが哲学の次元を離れて神話的な次元で描き出そうとしているのは、彼女が言うように、まさに言葉を語る宇宙、人間の口を借りて自らを言葉＝イデアとして顕現していく宇宙である。

コフの言語哲学が同時代のロシア思想の大きな流れの中に組み込まれていることを確認できる。そのことを確認した上で、ブルガーコフの言語哲学に関する検討をいったん終えることにしたい。20世紀初頭のロシア思想の潜在的な文脈を解明する作業はさらに続けるつもりであるし、そこから振り返ってブルガーコフの言語哲学をさらに広い視野から捉え返す作業も、機会があれば、いずれ改めて試みることにしたい。

本研究は、科研費補助金基盤研究 (C) 「ロシア・ルネサンス期の思想における生の哲学」(課題番号20520297) の助成を受けて可能になったものである。